滋賀文化財だより
NO. 33
1979. 12. 31
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

61. 近江坂本城跡の発掘調査〈速報〉

はじめに

近江坂本城跡は滋賀県大津市下阪本町に所在し、今回の調査対象地は大津市下阪本町（現在、下阪本三丁目）字城畔（しろくろ）1925番地にあたり、面積4161.99㎡である。

調査は坂本城の位置、城郭遺構の有無、城館全体の構造等を確認することを主たる目的とした。

調査方法としては、本遺跡は近世初期の城館であることから、文献の方面からは古文書、古絵図の調査を、考古学の方面からは下阪本集落内に存する石碑、石仏等の分布調査と調査対象地の発掘調査を行い、性格を明らかにするという総合的な方法をとった。

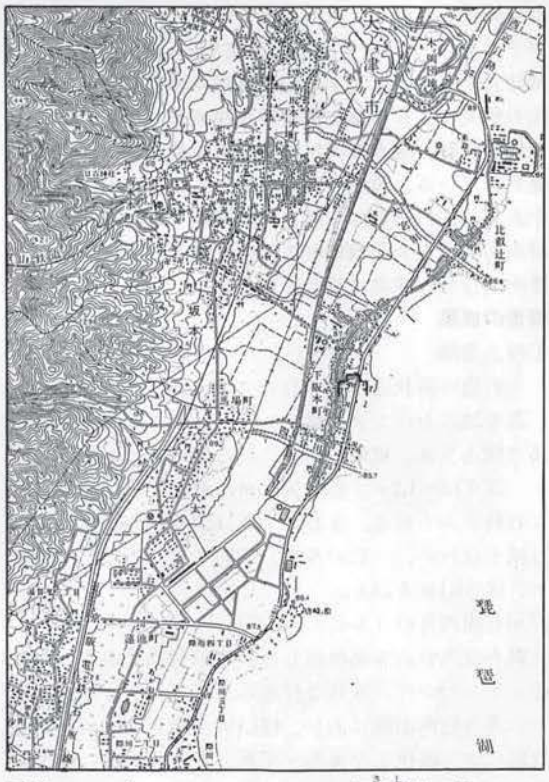
調査の経過は、昭和54年10月15日に宅地造成に伴う立会調査を実施した結果、表土下約30cmで厚さ約10～30cmの焼土層が検出された。しかも焼土中からは、近世の遺物（瓦類、土師器の皿、陶磁器等の土器類）が出土し、これらは、16世紀代、室町後期から安土・桃山時代（戦国時代）のものと判断した。

上記の結果、調査地内における焼土層の範囲、遺構の有無を確認する必要性が生じた。

本調査は11月5日から雑草の除草作業、地形測量から開始した。調査の結果、調査対象地の西側約3分の2の範囲にわたって、焼土層が拡がることを確認すると同時に、遺構としては石組の溝、石組の井戸、石組の暗渠・会所、池、石垣の基礎石、柱礎石、掘立柱建物等を検出した。また、調査地の東南方の隣接地湖中、現在の護岸石垣から約10mで石垣の一部を発見した。

位　置

近江坂本城跡は、京阪電鉄石坂線の松ノ馬場駅の東方約 700m、戸津説法で有名な東南寺の東方約50mの国道 161号線沿い、琵琶湖の湖畔に位置する。当該地の地形は比叡山東麓に源を発し東流する小河川・東南寺川が琵琶湖へ流入する河口付近にあたる。調査地は下阪本町集落の東端にあり、旧東南寺川（現在の東南寺川は東南寺の門前で急に流路を人工的に南方向にかえられていることから、いつの時期かに真直ぐ琵琶湖に向かって注いでいたものが流路を現在のように変換されたと推定できる）の河口にあたることが推定され、



琵琶湖の湖畔に立地することから小砂嘴（さし）状を呈している。

坂本城に関する従来の研究

近江坂本城は元亀2年（1571）比叡山延暦寺（山門）の焼き討ち以降、織田信長の命によって明智光秀が築城した。天正10年（1582）本能寺の変、山崎の合戦後、同年6月15日光秀の城は焼亡した。その後、羽柴秀吉の政権下となり、坂本城は丹羽長秀が再建した。のち守将は杉原家次、浅野長政が入ったのである。天正14年（1586）大津城へ移転し、坂本城は廃城と化した。廃城後、当該地には延暦寺の東南にあたることから東南寺（今津の浜に立地していたことから以前は今津堂と呼ばれた）が建てられ現在に至っている。

坂本城に関する文献資料は実に乏しく、『兼見卿記』・『多聞院日記』に若干記載されているのである。以後の文献として太田牛一著『信長公記』、江戸時代にいたると延宝6年（1678）黒川道祐『近畿歴覧記』、元禄年間（1688～1704）の『淡海録』、享保19年（1734）

寒川辰清編輯の『近江輿地志略(全)』「東坂本古城址」等がある。明治14年（1881）11月作成の『近江国滋賀郡下阪本村字箇所絵図』に字名として、城、城畔、的場、御馬ヤシキ、馬場、馬道、浄戒口(城界口)、瀬戸在家、廊ノ坊と記載され、かつての城館跡であることが推定できる。つぎに大正4年（1915）11月、下阪本村が東南寺の門前正面、西近江路との交差点に石碑「坂本城址」を建立した。以後、昭和に入り若干の研究がされた。例えば、『別巻大津市史』、津田幸種『坂本城誌』、下坂守『近江宇佐山城・坂本城』がある。津田氏の研究によると歴史地理学の視点から字名、水田・畑地の畦畔、現在の河川等から坂本城全体の構造を復原されている。最近の研究成果としては下坂氏のそれがある。氏の研究は文献史料が網羅され、比叡山焼き討ち前後から大津城移転までの記事を参考に坂本城の歴史的背景を詳細に論じておられる。

調査の成果

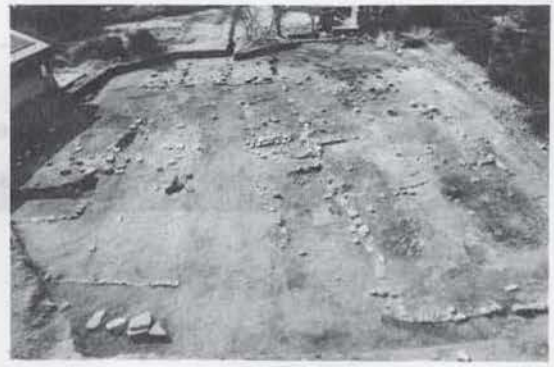
①検出遺構

a石組の溝状遺構（ＳＤ）

調査地において３条検出した。ＳＤ１は調査地の北端で検出され、東西に長くのびる溝である。幅0.5～0.7m、深さ1.0～1.2m、長さ約30mを計測し、一部溝底面に石敷がみられる。ＳＤ２・３は調査地西端にあり、石組とはいえ、一石のみで、水路と考えてよい。幅0.3m、深さ0.1mを測る。

b石組の井戸（ＳＥ）

調査地内から５基検出した。石垣付近で南北に３基並んでみつかり、ＳＢ２付近に２基みつかった。ＳＥ１は調査地西南隅にあり、径1.1m、深さ約2.0mを測る。内部には、破損した丸瓦・平瓦、焼けた木材、焼土が充満していた。底面には桶が置かれており、漆器椀・木製のハシが出土した。ＳＥ２～５はいずれも同規模で、径0.8m前後、深さ約2.0mを測る。井戸枠の石材はすべて花崗岩を使用し、巧みに組まれている。



遺構全景（東から）

c石組の池（ＳＧ）・暗渠排水溝（ＳＸ）

調査地の中央部やや北寄りと、ＳＢ２の東側との２地点から池状の石組が見つかった。（ＳＧ１・２）

ＳＧ１は1.6m×2.2m、深さ1.2mの規模をもち、東壁に石組の暗渠排水溝（ＳＸ１）が接続する。ＳＸ１は幅0.25m、深さ約0.15mで、蓋石には30～50cmの扁平な石材を使用している。さらに一度曲折して南へ溝状遺構（ＳＤ４一幅0.6m、深さ0.6～0.7m）がのびる。ＳＧ１の内部からは、10数点の軒丸瓦・数点の軒平瓦を含む多量の瓦類が出土した。

ＳＧ２は2.1m×5.8mの規模で、深さは0.5m前後を測る。石組は２段で、内部から鬼板・軒丸瓦などを含む多量の瓦類、美濃・常滑などの陶器類が出土した。

d石垣の基礎石

調査地の西南部分で検出した。石垣は２列並行しており、東側の列は約60～ 100cmの石材を使用し、南北長さ、現存で5.8mを測る。西側の石列はコ字形の石組で、幅4.0m×長さ8.7m（現存長）の規模をもつ。東壁

近江坂本城跡平面図

には約30～ 100cmの石材が斜位に据えられており、西壁は20cm前後の小型の石材を垂直に据えている。これは石畳状のものが想定される。この遺構は5.0mの間隔をおいて北へ続く。北側部分については残りが悪く、西壁のごく一部分が残るのみである。

e礎石建物（ＳＢ）

調査地の東半に南北に２ヶ所検出された。北側のＳＢ１は約30～50cmの石材を使用し、東西約20m×南北約８mの規模をもち長屋状の建物が想定される。

また、ＳＢ２については、東西14m×南北７m以上の規模をもち周囲に縁をもつ主殿風の建物が考えられる。２棟の建物の屋根は出土した瓦量から棟の部分にのみ瓦を使用し、他の部分は柿葺あるいは桧皮葺であったと思われる。

f掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ１・２の西側に集中して径30cm前後の柱穴がみられ、２棟以上の建物が想定される。

g湖中の石垣

調査地の東南方の隣接地湖中において、現在の護岸石垣から東へ約10mの地点でコ字形の石垣を確認した。長さ約22mを測る。

②出土遺物

今回の調査で出土した遺物は莫大な量の瓦類のほか、漆器、銭貨、青銅製品、鉄製品、石製品、陶磁器、土師器等がある。中でも注目すべき遺物は石組の溝内から出土した漆器の椀であろう。

a瓦類　軒丸瓦は４種類あり、３種は巴文瓦で、他の１種は宝殊文瓦である。軒平瓦は３種類あり、２種は唐草文瓦、他の１種は波状文と宝殊文の組合せの瓦である。鬼板は２種あり、１種は台に乗せられた火炎宝殊と波状文・宝殊の組合せの軒平瓦の文様のセットである。他に丸瓦、平瓦が多量に出土した。丸瓦の中には屋根を葺くときに固定するための釘穴の認められるものもある。

b漆器椀　石組の溝内から２個出土した。１個は内面赤色、外面黒色で径約15cm、高さ8.3cmを測る。他の１個は木製部が腐蝕して漆だけが遺存しており、外面には朱色で鶴か鷺の絵が描かれている。

c銭貨　調査対象地内全域から破片も含めて約50枚出土した。判読可能なもの開元通宝(唐銭)、寛永通宝を除いた銭貨は宋・明銭である。

開元通宝３・聖宋元宝３・元豊通宝３・熙寧元宝３
政和通宝２・元祐通宝２・紹聖元宝１・景定元宝１
皇宋通宝１・景祐元宝１・淳熙元宝１・淳化元宝１
祥符元宝１・明道元宝１・天聖元宝１・永楽通宝１

d青銅製品　刀装具の一部、鋲頭など。

e鉄製品　瓦留用の釘が数点。

f石製品　一石五輪塔、五輪塔の水輪・地輪部各１、石臼の断片３。

g土器類　土師器の皿は径約５～10cmを測る。陶器類には、壺・甕・椀・鉢・擂鉢・天目茶椀・皿・硯等の断片が出土した。その産地としては、信楽が最も多く約50～60％を占め、つづいて常滑・美濃・瀬戸がみられ、わずかに備前・丹波がある。さらに、非常に少ないが唐津・古伊万里・織部がみられる。

磁器には明代の景徳鎮窯・竜泉窯系などの青磁・青白磁・白磁の椀・皿がある。さらに明代の染付椀も多量に出土している。

まとめ

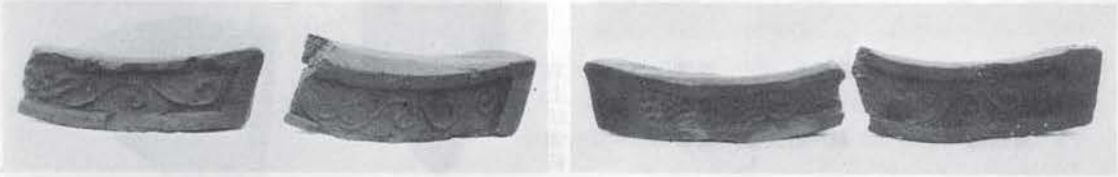
今回の調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査とはいえ、従来まったく調査がなされていなかった近江坂本城の推定地において、宅地造成という偶然の契機によって発掘調査を行うことができた。

調査の結果、先にも述べたように安土・桃山時代の多量の遺物と石組の溝・井戸・池・暗渠排水溝・石垣・礎石建物・掘立柱建物等の遺構を検出した。

この遺構群は、出土遺物の年代・焼土層の広がり、焼土層の上・下層にみられる二時期の遺構の存在、明治14年11月作成の古絵図にある小字名などから考えて、比叡山焼き討ち後、織田信長の命により、明智光秀が構築した近江坂本城であることはほぼ間違いないであろう。

また、坂本城のすぐ後に建てられた水城の大津城・膳所城の縄張りから、今回発掘調査した地点は、城郭内の中心部分と考えるのが最も妥当である。さらに検出された礎石建物の上屋を復元するとＳＢ１・２とも住宅風のものとなり、特にＳＢ２は四周に縁をもつ主殿風の立派な建物である。このようなことからみて、ＳＢ１・２の建物は、城主及びその一族か、上級家臣団が居住していた居館跡の一部と推測されるのである。

（吉水真彦）

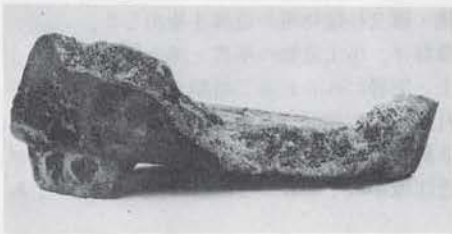


近江坂本城跡出土遺物　軒平瓦

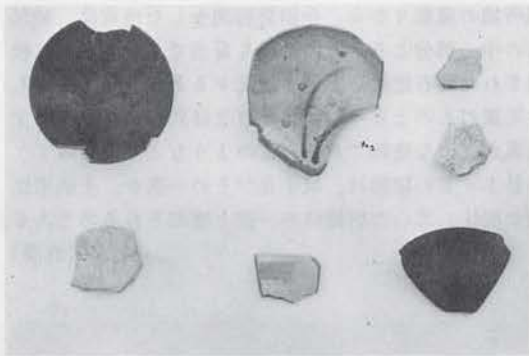
▲軒　丸　瓦

▲軒　丸　瓦

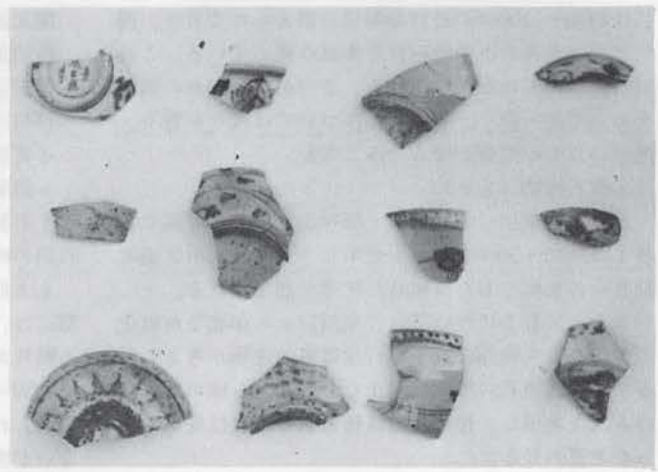
▲軒　丸　瓦　　軒瓦



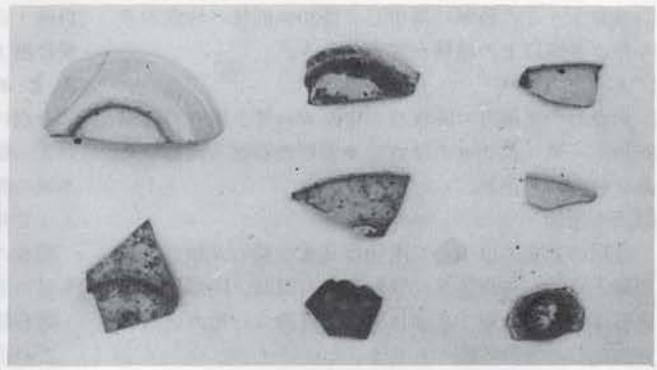
▲石　製　盤



天目（中国製）　唐津　　美濃
　　灰釉
青白磁　　瀬戸白天目　天目

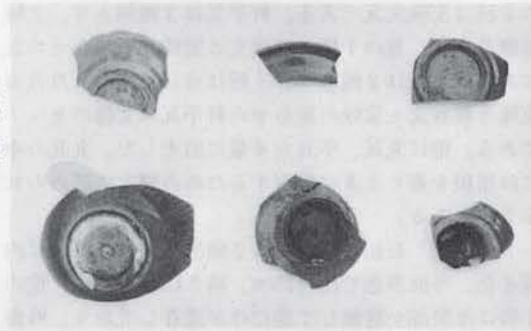


▲明代染付

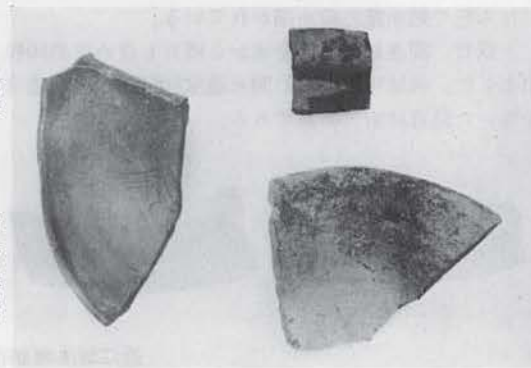


▲明代白磁

▶明代青磁



▶信楽



右上は備前

近江坂本城跡出土遺物